

32) サトイモ

1 主要な作型及び病害虫の発病・加害時期

マルチ栽培												
月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
栽培暦				◎								
黒斑病												
乾腐病												
汚斑病												
ハスモンヨトウ												
アブラムシ類												
ハダニ類												
◎定植 □収穫												

2 主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
黒斑病 (<i>Ceratocystis</i>)	①種いもは健全なものを使用する。 ②排水を良好にする。 ③ほぼ2年でほとんど発病しなくなるので、3年1作を実施する。 【参考事項】 子のう殻、子のう胞子、厚膜胞子、分生胞子を形成する。各形態とも伝染源となるが、厚膜胞子、分生胞子が主な伝染源と考えられる。 被害残さを含む土壌と保菌種いもが伝染源である。 生育中に種いもから親いもへと感染する。激発すると、さらに子いも、孫いもに感染する。 病原菌が子いも、孫いもに侵入・感染するのは主に収穫の際で、脱球時と調製作業時の傷口からである。 夏の高温高湿時の収穫は感染を受けやすい。	①植付け前に脱球し、種いもを浸漬消毒する。 (例) チウラム・ベノミル水和剤（ベンレートT水和剤20） チオファネートメチル水和剤（トップジンM水和剤）
乾腐病 (<i>Fusarium</i>)	①連作を避け、輪作期間はできるだけ長期間とる。 ②種いもは無病畑で採種し、子いもや孫いもを使用する。 ③他産地から種いもを導入したときは、一部のいもの下部を切断し断面に病変のないことを確認する。 ④種いもは親株につけたまま貯蔵する。 ⑤発病株を除去し、処分する。 【参考事項】 第一次伝染源は土中の罹病いも残さと保菌種いもである。 長期の連作は場で激発しやすい。 28～30℃の高温下で激増する。 一般に、土壌の乾湿の変化の大きいほど発病しやすい。	①植付け前に土壌混和する（土壌病害虫の防除法の項参照）。 (例) ダゾメット粉粒剤（ガスタード微粒剤、バスアミド微粒剤）
汚斑病 (<i>Cladosporium</i>)	①生育中期以降に肥料切れしないよう肥培管理を適切にする。 ②被害葉は、次作への伝染源となるため取り除く。 ③連作を避け、なるべく長期の輪作を行う。 【参考事項】 円形で指紋のような病斑で、数が増えてひどくなると、秋末には早く枯れ込む。	登録農薬はない。

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
アブラムシ類	<p>①シルバーフィルムマルチをする。</p> <p>②ほ場内や周辺の雑草・作物残さなどが発生源となるので、これらを取り除く。</p>	<p>①植付け時又は植付け前に粒剤を土壌混和する。 (例) イミダクロプリド粒剤 (アドマイヤー 1 粒剤、植付時) チアメトキサム粒剤 (アクタラ粒剤 5、植付前)</p> <p>②発生初期から農薬を散布する。 梅雨明けまでの防除を徹底する。 散布する農薬は、同一系統 (RACコードが同じ) の農薬を連続して使用しないようにする。 (例) イミダクロプリド水和剤 (アドマイヤー顆粒水和剤) ペルメトリン乳剤 (アディオオン乳剤) PAP乳剤 (エルサン乳剤)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>主にワタアブラムシが寄生する。本種は、ナス、ピーマンなどのナス科作物、キュウリなどのウリ科作物、イチゴ、キク、ユリ、カーネーションなどに寄生する。 サトイモモザイクウイルス (DMV) やキュウリモザイクウイルス (CMV) を媒介する。 サトイモへは、5 月頃からナスやキュウリ、雑草などで繁殖したものが飛来してくる。 梅雨明けとともに急激に増加し始め、8 月に最も発生が多くなり、9 月下旬まで発生が続く。</p>	
ハスモンヨトウ	<p>①卵塊又は分散前の幼虫寄生葉を除去する。</p>	<p>①被害葉がみられ始めたら、幼虫が分散しないうちに農薬を散布する。 1 回の農薬散布では十分な防除効果が上がらない場合があるので、数回の防除を行う。 農薬は葉の表裏にむらなく散布する。 (例) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) フルベンジアミド水和剤 (フェニックス顆粒水和剤) レピメクチン乳剤 (アニキ乳剤)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>ナス科、アブラナ科、ウリ科、マメ科、キク科、サツマイモ、ネギ、シソ、イチゴ、ホウレンソウ、オクラなどの多くの作物を加害する。 暖地性の害虫であるが、暖房のきいた施設内での越冬は可能であり、発生源となると考えられる。 長距離移動性の害虫で、西南暖地から北へ移動しながら発生地を拡大する。 成虫の発生は 4 月頃からみられ、サトイモで被害が発生するのは 7 月以降である。 夏が高温の年に発生が多い。</p>	
ハダニ類	<p>①ほ場内や周辺の雑草や作物残さなどが発生源となるので、これらを取り除く。</p>	<p>①発生初期から農薬を散布する。 虫の発生に注意し、多発前に防除する。 農薬は葉の両面に対してかけむらのないように散布する。 梅雨明け後に発生が多くなるので、それまでに農薬散布で防除を行う。 (例) クロルフェナピル水和剤 (コテツフロアブル) (カンザワハダニ) ビフェナゼート水和剤 (マイトコーネフロアブル、ダニ太郎) ミルベメクチン乳剤 (コロマイト乳剤)</p>
	<p>【参考事項】</p> <p>本種は、ナス、スイカ、メロン、イチゴ、ダイズなど多くの作物に寄生する。 成虫は、冬は果樹や樹木類の樹皮間隙などで休眠越冬する。 ハウス内では冬でも繁殖する。 サトイモへは 6 月下旬頃から寄生してくる。 発生は梅雨明けとともに急激に増加し始め、盛夏期に最も発生が多くなる。 風によっても虫が運ばれて広がっていく。 降雨が少なく高温乾燥の日が続くと多発する。</p>	